

〈研究ノート〉

ヨーロッパ・ギルド史研究の一動向

ーオーグルヴィとエプスタインの論争を中心にー

唐澤達之

Recent Studies in Craft Guilds in Pre-industrial Europe

Tatsuyuki KARASAWA

Summary

After 1980s, craft guilds in pre-industrial Europe have been rehabilitated not only as socio-cultural institutions but also as efficient economic institutions which benefited the pre-industrial economy by revisionist scholarship. But, this rehabilitation view has met with the criticism that sees craft guilds as exercising costly monopolies. This paper reviews recent studies in craft guilds, and discusses important questions which the debate raises; market conditions in the pre-industrial economy, regional differences in crafts guilds, the political economy of craft guilds, and the way to approach them.

はじめに

近年、工業化前ヨーロッパのギルドに関する研究は新たな展開を見せている。特に1980年代以降蓄積されてきた新しい研究は、従来のギルド像に大きな修正をせまるものであり、活発な論争を引き起こしている。本稿の目的は、近年 *Economic history review* 誌を主要な舞台として展開したオーグルヴィとエプスタインのギルド制をめぐる論争を中心に、そうした新しい研究動向の一端を整理紹介することである¹⁾。

新しい研究動向のなかで修正を迫られてきた従来のギルド像とは、対外的独占と対内的平等を基本原理とする保守的な団体としてのイメージであるが、これを修正する方向は大

きく分けて2つある。そのひとつは、ギルドの持つ多様な機能、すなわち経済的機能以外の機能に着目することによって、営業独占の団体としてのイメージを相対化するものである。例えば、中世後期から近世にかけてのイギリス都市の「危機」と「安定」に関わる論争においては、都市社会の秩序形成という観点から、ギルドの社会統合機能や、ギルドを通じた都市住民の政治参加が重視された²⁾。また、ギルドという語の本源的な意味に遡って、フラタニティに関する一連の研究が発表されたことも、ギルド像の再検討の文脈に位置づけることができると思われる³⁾。

もうひとつの方向は、ギルドの経済的機能そのものについての再検討である。例えば、中世から近世にかけての長期的経済趨勢のな

かにギルドを位置づけることによってその動態的な把握を目指す研究は、ギルドが都市経済の繁栄・衰退に柔軟に対応していたことを明らかにし、ギルド規制の特徴とされる対内的平等と対外的独占は、経済衰退とギルドの政治力の増大という条件の下でのみ典型的に現れたとする⁴⁾。さらに近年は、ギルドの古典的なイメージを相対化するに留まらずさらに一步進んで、ギルドが中・近世ヨーロッパの経済発展にとって大きな貢献をしたとする研究が現れてきた。本稿が紹介する論争の一方の当事者であるエプスタインは、ギルド制と、それに付随する徒弟制度を始めとする諸制度が、中・近世ヨーロッパ市場経済の不完全性を補いつつ、技術革新を促進したとしており、新しいギルド像の構築に主導的な役割を果たしている⁵⁾。こうしたギルド像の修正に対して徹底的な批判を試みたのが、論争のもう一方の当事者であるオーグルヴィである。

ところで、両者の間の論争の詳しい紹介に入る前に、近年ギルド像の修正が進められてきた研究史上の背景について、あらかじめ2点ほど留意しておきたい。第1は、問題視角の大きな変化である。アカデミックな歴史学が成立して以来20世紀の半ばにいたるまで、ギルド史研究——より広く中世都市研究といってもよいと思うが——は、近代資本主義や近代市民社会の発生史という問題関心と密接に結びついてきた。それに対して、1980年代以降社会史研究の隆盛にともないより鮮明になってきたギルド史研究の新たな視角は、ギルド制度をその制度が存在した当時の社会の文脈のなかに位置づけるという視角である。一般に、発生史的な視角からすると、近代以前の社会の特徴は近代社会のそのネガとして規定される傾向があり、ギルドに対する評価も、近代資本主義形成にとっていかなる役割を果たしたのかという観点からなさ

れ、消極的なものであった。他方、後者の視角からすると、ギルド制度が中世から近世にかけて長期にわたって存続することができた理由を説明することが大きな課題となるので、どちらかといえば制度の弱さよりも強さが、また環境の変化に対応できる柔軟性やその多種多様な機能が評価される傾向にある。

第2は、経済学における制度への関心の高まりと、その歴史研究への応用である。新制度学派や歴史制度分析による経済史研究は、市場経済を支える制度への関心を深め、市場経済の歴史的形成のプロセス、近代国家成立以前の市場経済のあり方に関する研究に大きな刺激を与えてきた⁶⁾。特定の制度を共有する集団への関心の高まりを背景として、ギルドという集団がどのようなルールをどのように共有し、またそのルールが経済発展にとってどのような役割を果たしたのか⁷⁾が再検討の対象となったのである。また、制度やその歴史的経路依存に対する関心は、経済史研究の領域に留まるものではない。例えば、いわゆる社会関係資本social capitalに関する研究の隆盛の立役者の1人であるパトナムの政治学研究は、現代イタリアの州自治のパフォーマンスの地域差を説明する要因として中世以来の北イタリアの市民的伝統、ギルド制を基礎とした市民の政治参加を重視している⁷⁾。

それでは、以上のような研究史上の背景に留意しつつ、オーグルヴィとエプスタインの論争の整理紹介を始めよう。ここに紹介する論争の発端は、オーグルヴィが2004年に*Economic history review*誌に掲載された論文において、ヴェルテンベルクのウステッド工業の事例研究から得られたデータをもとに、近年有力になりつつあるギルドの修正論を徹底的に批判したことにある⁸⁾。そして、この論文を主たる対象としてエプスタインがオーグルヴィに挑んだ論争と、それに対する

オーグルヴィの応答が2008年に同誌に掲載された。両者の所説は同誌以外のところでも発表されているが、本稿では、*Economic history review*誌上で展開された議論を中心に整理し、それを理解するうえで必要な範囲において両者の他の論考についても言及することとしたい。論争の主たる論点は、ギルドによる品質管理、ギルドにおける職業訓練、ギルドと技術革新、社会関係資本としてのギルド、の4点であり、以下順をおって整理検討していくが、論争のプロセスにおいて、両者の間にはギルド史研究の方法をめぐる見解の対立が浮かび上がってくるので、最後にその点についても整理する。

1 ギルドによる品質管理

近年のギルド修正論の論点のひとつは、ギルドによる品質管理が、製品の品質に関して生産者と商人・消費者の間に存在する情報の非対称性の問題の解決に貢献したというものである。ギルドによる品質チェックを経た製品には、商標や検査済印が付され、これらが製品の品質を保証する目安となったとされる¹⁰⁾。

オーグルヴィは、こうした再評価に対して以下のように批判する。まず、ヴェルテンブルクのウステッド工業の事例では、ギルド規約の条文を見ると品質管理に関する条文の数が少なく、また、その施行や違反に対する処分が弛緩していく事実を指摘して、品質管理に対するギルドの関心が弱かったとする。その理由として、第1に、ギルドのような自治的な組織においては、構成員を処分することに対してマイナスのインセンティブが働いたこと、第2に、ギルドによる検査は、製品の外見（サイズなど）をチェックするに留まり、検査を通じてスキルを向上させるインセン

ティブを持たなかったことを指摘している。

次に、品質低下を結果的にもたらすような、ウステッド工業組織上の構造的な問題があったとする。すなわち、第1に、織布工のギルドが原料羊毛価格に上限を設定したため、羊毛商人が低品質の羊毛を供給するようになったこと、第2に、織布工ギルドと商人染色業者組合が紡糸工の工賃の上限を設定したため、農村の貧しい紡糸工（特に女性）の生活を脅かすだけでなく、高品質の糸を紡ぐインセンティブを彼（女）らから奪ったこと、第3に、織布工ギルドとカルフCalwの商人染色業者組合の間に独占的な売買契約が結ばれ、生産量や価格が固定されていたために、織布工から品質改良のインセンティブを削いだことである。

さらに、ギルドは、品質の高さを主張することによって、低品質＝低価格の製品の生産者を市場から排除することになり、そうした製品に対する消費者のニーズに対応することができないだけでなく、ギルドの独占的な地位は、単一の品質水準を維持するのには向いていても、消費者の多様で変化するニーズに柔軟に対応することができないとする。

最後に、ヨーロッパの他のウステッド工業地域を見渡すと、中世のドウエDouai、16世紀のホントスホーテHondschoote、17世紀のゲーラGera、16～17世紀のノリッジNorwich、18世紀のヨークシアのウェスト・ライディングWest Ridingなど、ギルド規制の弱い地域でも良質なウステッドが生産されていることを指摘して、ギルドによる品質管理がウステッド工業の発展をもたらすものではなかったとする。

このようなオーグルヴィの見解に対して、エプスタインは以下のように批判する。品質管理に関する条文の重要性は単純にその数だけで測れるものではないこと、そして、オー

グルヴィ自身が提示したデータにおいても、ギルド規約の違反件数全体において品質管理違反の件数が占める割合は大きく、品質管理は依然として重要であるとする。さらに、織布工ギルドの品質管理への関心が生産量の固定によって低下したとするオーグルヴィの説は疑わしい。なぜなら、1700年以降、生産量は引き続き固定されたままであるにもかかわらず、品質管理違反の件数が増加し、品質管理への関心が再び高まっているからである。むしろ、この地域のウステッドに対する需要が三十年戦争の余波によって低品質の織物にシフトし、再び18世紀初頭から品質の改善が見られたと解釈するほうが妥当であるとする。

そして、オーグルヴィが品質管理と消費者のニーズへの対応においてギルドが無力であり柔軟性を欠いていたとする点については、以下の3つの点で歴史的現実を無視しているとして批判する。第1に、品質管理のあり方は生産物そのものの性質によって多様であり、それに対応して品質管理のための制度的枠組みも、事前に徒弟制度などを通じてスキルをモニターするものから、事後的に違反者を処分するというものまで多様である。第2に、ほとんどのギルドは競争的な市場においてプライス・メーカーではなくプライス・テイカーであって、新製品の開発や製品の差別化によって需要の変化に対応できなければ衰退した。第3に、ヴェルテンブルクのウステッド工業の場合は、農村に工業生産が広がり、ギルドの構成員が地理的に分散して居住していたので、品質管理が不徹底にならざるを得なかったとみる。

最後に、エプスタインは、ギルドによる品質管理が、競争相手であるコストの低い生産者を市場から排除しているのではなくて、意図せざる結果ではあるが、低品質の市場を作

り出していたとする。

こうしたエプスタインからの批判に対し¹³⁾、オーグルヴィは以下のように応答する。品質を高く設定するギルドの品質管理は、低品質＝低価格の生産物をブラックマーケットに追い込み、貧しい消費者は騙された場合に法的な救済を受けることができない市場での取引を強いられたとする。また、品質管理違反が多く見られたことは、品質管理が徹底されていたことを示すのではなく、品質管理が行き届いていなかったことと、品質管理に対する関心の低さを意味するとしている。さらに、ヴェルテンブルクのウステッド工業は、地域社会の世帯主のうち26～43%は局地的に集住していたこと、ヨーロッパの他の地域の事例は、品質とギルド規制の間には相関関係がないことを示していること、三十年戦争後低品質の織物への生産にシフトし1700年以降品質の向上が見られたとするエプスタインの推測は実証できないとする¹⁴⁾。

2 ギルドとスキル・労働市場

近年のギルド修正論の第2の論点は、ギルド制とスキル・労働市場の関連をめぐるものである。工業化以前の手工業生産ではスキルを必要とするが、機会主義的行動と情報の非対称性が存在するがゆえに、スキルを修得した労働力を確保することが難しい。そこで、ギルドは徒弟登録条件の設定、徒弟修了証の発行、親方資格を得るための様々な条件の設定によって、熟練労働市場の不完全性を克服するうえで有効に機能したとされる¹⁵⁾。

この論点について、オーグルヴィは以下のように批判する。第1に、そもそも工業化以前の多くの手工業生産は高度なスキルを必要とせず、したがって長期間にわたる職業訓練も必要でなかった。このことは、ほとんど

のヨーロッパの毛織物工業、特に16世紀後半以降普及するウステッド系の新織物New Draperiesでは顕著であった。ヴィルトベルクWildberg地域で、徒弟修業を経験していない女性(寡婦)の営業がかなり広範に展開していたことは、このことを裏付けているとする。

それでは、ギルドでの職業訓練が必要でなかったにもかかわらず、何故ギルドは職業訓練に関する規制を課していたのであろうか。オーグルヴィは、その理由として、第1に、一部の手工業ではスキルを必要としていたこと、第2に、ギルド規制を正当化するためのレトリックとして利用したこと、第3に、競争相手の参入を規制するために利用したことを指摘している。このうち最後の点について、ヴィルトベルク地方の事例をあげて、ギルド構成員(とその子弟)とそれ以外の者(とその子弟)の間に徒弟登録条件やギルドへの加入条件に差を設けることによって、親方資格がギルド構成員の子弟によって独占されていくことが示される。

また、オーグルヴィは、ギルドから排除された者(女性やユダヤ人など)が営業するブラックマーケットがあり、これらに対抗して営業独占を実現するためにギルドがロビー活動を展開したこと、ヨーロッパ全体を見渡すと、近世にギルド規制(職業訓練)を弛緩ないし廃止することによって復活した毛織物工業地域が見られることを指摘して、ギルドの存在理由は、職業訓練以外のところにあったとする。

エプスタインは、以上のようなオーグルヴィの見解が、歴史的事実としても、論理的にも支持できないと反論する¹⁷⁾。すなわち、第1に、オーグルヴィの指摘する史実が、ウステッド工業に限定されていることの問題である。職業訓練をほとんど必要としないウス

テッド織布業があったことは想定できるが、しかし、ヴェルテンブルクの徒弟が職業訓練を受けられないことを理由に逃亡した事例をオーグルヴィ自身が挙げており、このことは、ギルド制のもとでより洗練された職業訓練が行われていたことを示唆する。第2に、オーグルヴィの見解はウステッド工業についてはある程度妥当するかもしれないが、近代以前のヨーロッパのすべての手工業に一般化することはできない。近年の研究によれば、1700年頃のイングランドでさえ、徒弟として職業訓練を受けた労働者人口が29万~46万人と推計されている¹⁸⁾。

寡婦や子どもたちは、親方とともに働いており、そのプロセスで事実上職業訓練を受けている。また、紡糸工は女性が多い。近代以前のヨーロッパにおいてギルドだけが熟練技術の提供者であったわけではないというオーグルヴィの主張は正しいが、ブラックマーケットが存在するからといって、直ちにギルドが必要なかったとはいえないとする。

さらに、オーグルヴィの著書で提示されたデータによれば、ヴィルトベルク地域のウステッド織布業者のトップの27名の織布工のうち26名までがギルド規制の強い都市に居住しており、このことは徒弟制度に関するギルド規制が厳格であった都市のほうが、それが緩やかであった農村よりも労働生産性が高かったことを示唆すると、エプスタインは指摘する。

これに対するオーグルヴィの応答は、以下の通りである²⁰⁾。エプスタインは、工業化以前のウステッド生産がスキルの伝達・継承にギルドを必要としない点でユニークであると指摘しているが、他の手工業生産を見ると、同一の手工業生産が、ある社会ではギルドに組織化され、他の社会ではギルドに組織化されていないという事例が多く見られるので、そ

うした指摘はあたらぬ。また、エプスタインは徒弟制度の重要性を示すためにイングラントやネーデルラントにおける徒弟人口の多さを主張しているが、これらの国では徒弟修業を経ていない労働者人口も多いので、これも十分な根拠とはいえない。

さらに、エプスタインがオーグルヴィの提示した証拠にもとづいてオーグルヴィの議論を批判している点についても、誤読があるとしている。例えば、エプスタインは、親方の娘が手工業生産を自由に営むことができるとしているが、それは誤りであり、また、紡糸工程での女性労働は重要であるが、ギルド規制によって女性労働は紡糸工程に限定されていたのである。さらに、都市と農村の間の労働生産性の差に関するエプスタインの指摘についても、労働生産性と生産量を混同しているだけでなく、ギルド規制が農村にも及んでいたことを無視していると批判する。

3 ギルドと技術革新

修正論の第3の論点は、ギルドと技術革新の関係に関わるものである。すなわち、ギルドは、「技術革新に対して抵抗しない」だけでなく、「技術革新を促進する」という評価である。ギルドは、確かに資本集約的・労働節約的な技術革新に対しては抵抗したが、スキル集約的な技術革新に対しては抵抗しなかったとする。そして、手工業者たちの地理的集住（徒弟制度を効果的にモニターするためにこの傾向があったとされる）と地理的な移動（信仰上の理由による亡命や職人の遍歴制度など）がもつ外部性と、新技術の開発によって獲得できる独占レントが、技術革新を促進する要因となったとされる。²¹⁾

オーグルヴィは、ギルドが「技術革新に対して抵抗しない」という修正論について、以

下のように批判する。²²⁾ 第1に、ある特定の技術革新が親方のレントにマイナスに影響する場合には、ギルドによる抵抗があったこと、また仮に、ギルドが資本集約的・労働節約的な技術にのみ抵抗したのだとしても、それによって産出量が減少し経済に対してマイナスの影響を及ぼした。第2に、修正論によれば、新しい技術が抵抗された場合でも、それらの技術の多くは役に立たないものであったとされるが、そもそも役に立たない技術にギルドが抵抗するというのは矛盾しているとする。第3に、修正論によれば、仮に役に立つ技術に対する抵抗があったとしても、新技術の開発は秘密裡に行われることが普通であり、また、新技術の採用者がギルドから離脱してしまう危険性があったので、抵抗の試み自体が失敗に終わったとされる。が、しかし、オーグルヴィによれば、新技術を隠しておくにも、ギルド規制から逃れて新技術を採用するにも費用がかかり、また、工業化以前のヨーロッパでは、政治権力、保護主義的政策、市場の分断、運送費、移動の制限などによって、ギルドによる営業独占が可能であったとされる。

次に、ギルドが「技術革新を促進する」という修正論について、オーグルヴィは以下のように批判する。²³⁾ 第1に、独占レントが技術革新へのインセンティブを高めるという論点は、未だ十分に検証されていない。第2に、職人の遍歴制度の有無と、労働力の地理的流動性の高低とは必ずしも相関していない。例えば、職人の遍歴制度のないネーデルラントでも労働力の地理的流動性が高かったし、他方で、ヴェルテンベルクでは、職人の遍歴制度があったにもかかわらず、織布工ギルドが、よそ者職人の定住を禁止することによって、彼らが普及させていたかもしれない革新的な技術を排除してしまったのである。第3

に、徒弟制度と職人制度は技術の世代間継承に必須の条件とはいええない。ヴュルテンベルクのウステッド工業の事例では、徒弟に職業訓練を提供しない親方が処分されていないなかったり、欠陥のある親方作品を制作した職人が親方資格を得ていたり、ギルドで公式の職業訓練を受けたことのない寡婦が合法的に営業していた。また、ギルドにおいて職業訓練を受けることを否定されている未婚の女性やユダヤ人などは、何らかの方法でスキルを修得していた。第4に、ギルドが、技術の伝播に好ましい条件となるような手工業者の地理的集住をもたらすとは限らない。ヴュルテンベルクをはじめ中欧、南欧、東欧の各地ではギルドの構成員が地理的に分散しているにもかかわらず、規制が行き届いていた。

オーグルヴィは、ギルド規制が、意図せざる結果として技術革新にマイナスの影響を及ぼすことがあったとする。例えば、品質管理のために設けられた製造工程に関する厳格な規制によって生産方法が硬直化したり、ギルド構成員間の競争を排除することを目的とした価格統制によってコスト削減のための技術革新へのインセンティブが削がれたりすることがあった。また、長期にわたる徒弟期間と職人期間が加入条件として課されたために一部の者たちの技術革新が阻害されたり、品質管理とスキルの維持を目的として個々のギルドの職域を明確に区分したことによって、隣接分野間のアイデアの生産的な交換を妨げたりすることもあった。ヴュルテンベルクのウステッド工業の事例では、以上のように技術革新が阻害された事例が多々見られるのである。そして、ヨーロッパ全体を見渡してみると、ギルド規制が弱い地域（イングランドやネーデルラント）のウステッド工業のほうが、新しい技術を生み出しているとする。

ギルドが「技術革新に対して抵抗しない」

という論点をめぐっては、エプスタインは以下のようにオーグルヴィの見解を批判する。オーグルヴィ自身も認めるように技術革新に対するギルドの姿勢は複雑である。例えば、ヴュルテンベルクの織布工たちは、1650年までは多種多様なウステッドの導入に抵抗しなかったが、1650年以降になると新しいタイプの織物の生産に対する抵抗が始まる。しかし、オーグルヴィは、この対応の変化について十分検討せず、その要因を単純にギルドに内在する保守的な性格に求めている。エプスタインは、織布工ギルドが抵抗したのは、商人染色業者が織布工との間に独占売買契約を結ぶことによって生産のリスクを商人から生産者に転嫁しようとしたからなのではないかと推測する。

そして、ヴィルトベルクのギルドの事例を、ヨーロッパ全体に一般化することはできないとする。また、経済的には役に立たない技術に対してギルドが抵抗するというのは矛盾しているとするオーグルヴィの主張に対しては、役に立たない技術であっても、製品の品質に関する評判が傷つけられたり、フリーライダーの親方たちによる安売りが行われたりすることによって、ギルドが損失を被ることがあったために、そうした技術に対する抵抗があったとする。

ギルドが「技術革新を促進する」という論点については、修正論に関するオーグルヴィ²⁴⁾の理解は誤っているとする。エプスタイン自身も含めて多くの者は、ギルドによる徒弟制度の強制がいくつかのプラスの外部性を生み出すことを論じてきたが、これらの外部性はすべて、ギルドにおける職業訓練の意図せざる結果であり、また、ギルド制が職人の移動を必然化させるうえで不可欠な制度であるとは誰も主張していないとする。

このようなエプスタインの批判に対して、

オーグルヴィは以下のように応答する。²⁶⁾第1に、エプスタインはギルドが有害な技術革新に対してのみ抵抗したと推測しているが、もし有害であったら、その技術を採用した者が仕事を失うだけであり、なぜ抵抗するのかの説明できない。第2に、もともとエプスタインはギルドが技術革新に直接貢献すると主張しておきながら、そうした初期の主張を捨て去り、徒弟制度が知の継承を間接的に促進したと主張を変えている。しかし、「近代以前のヨーロッパではほとんどすべての技術的な知識がギルドによって生み出され伝達された」とする彼の主張を支持するような証拠はほとんどないし、ギルドに組織されていない工業生産においても技術革新が見られたとする。

またオーグルヴィは、自身の著書に対するエプスタインの理解の誤りをも指摘する。ヴェルテンベルクの織布工ギルドが1650年以降になってはじめて技術革新に抵抗し、またその理由が商人による織布工程に対する支配にあったとする彼の理解は誤りである。技術革新に対する織布工ギルドの抵抗はすでに1619～21年にみられ、また1650年以降の抵抗の先頭にたったのは、商人染色業者組合であった。

4 社会関係資本としてのギルド

近年、政治学者や経済学者による研究の中には、有益な社会関係資本を生み出す社会的ネットワークの事例として工業化前ヨーロッパのギルドに注目するものがある。例えば、パットナムは中世北イタリアのギルドによって組織された社会が、情報の伝達、規範の強制、集団行動を容易にし、統治のモニタリングを確かなものとしたという。²⁷⁾また、開発途上国の経済や移行期にある経済を研究する経

済学者たちも、経済発展を促すような社会的ネットワークの構築という現代的な問題関心から、社会関係資本に注目している。

オーグルヴィによれば、ギルドは、他の社会的ネットワークと同じように、規範の共有、情報の流れの改善、違反に対する処分、規範を守るための集団行動という4つの点で、社会関係資本を生み出すが、ギルド構成員の独占的な利益を守るための制度であって、社会経済全体にとって有益ではなかったとされる。したがって、社会関係資本は経済全体に利するかもしれない逸脱行動を取り締まることによって、革新性と経済的福利を減ずることがありうる、というコールマンの所説が示唆的であるとする。²⁸⁾

その理由は以下の通りである。ギルドが共有する規範は、職業訓練ではなく加入制限を目的として徒弟制度を強制したり、ギルドから女性を排除したりするなど排他的な性格を持っており、情報の共有といっても違反者を摘発するための情報のネットワークとして機能しており、違反者の処分も独占的な利益を脅かす者を処分するものであった。また、ギルドは、独占的な利益を守るために政府に対してロビー活動を頻繁に行っており、ロビー活動のための支出がギルドの財政支出全体に大きな割合を占めていた。ギルドが広範かつ長期にわたって存続した大きな理由の1つは、コストのかかるロビー活動を頻繁に行うためであったとする。

そして、政治権力が団体の特権に強制力を提供することができない地域、あるいは、それらの特権から逃れることによって経済的政治的利益を得ることができた地域において、ギルドは弱体化したのであった。例えば、フランドル地方では、農民たちの織布業から利益を得ていた強力な領主権力が、リールLilleとトゥールネーTournaiの強力なギルド支配

による妨害から農村織布業を守っていたため、ギルドはそれに対抗するために加入制限を弛緩せざるを得ず、その結果都市のギルドが競争力を持ち続けたとされる。

エプスタインは、社会関係資本という概念を使用しているわけではないが、社会関係資本としてのギルドについてのオーグルヴィの批判に関連して、大きく分けて2つの点から反批判を試みる。³⁰⁾第1に、オーグルヴィが強調するギルドの排他的な性格について、エプスタインは疑問を投げかける。まず、徒弟登録料が、ギルド構成員の子弟は免除されるのに対して、その他の子弟は支払わねばならないのは、ギルドの排他性を示しているように見えるが、徒弟の能力や意志、職業訓練を施した費用を回収できるかについて情報の非対称性があるので、自分の子どもを雇う場合には無料でも、その他の徒弟から登録料を取るの合理的である。また、経験的な知識は極めて重要であり、スキルの獲得には時間と努力が必要であり、徒弟修業に長い期間をかけるのは当然である。さらに、1650年以降ヴェルテンブルクで、ギルドに加入していない織布工の数が急減する原因は、同時期にギルドの親方数が増加する一方で生産量が減少しているところからみて、ギルドによる排他的な政策ではなく、局地的な需要の弱さであると考えられる。最後に、ギルドが女性を排除しているとの指摘については、多くの女性が紡糸工程などで働いていること、また、近代以前の社会における性差別は、ギルドによって発明されたものではないとする。

第2に、ギルドのレントシーカーとしての側面については、以下のようにオーグルヴィの主張を批判する。まず、ロビー活動に対するギルドの支出総額は大きい、1人当たりの負担額は小さく、したがって、ヴィルトベルクのギルドの営業特権の価値（論理的に

は死荷重損失の価値）は小さかった。また、近代以前の市場経済においては、市場の失敗を克服するために政治的・制度的コーディネーションを必要としており、あらゆるレントシーキングを否定的に評価することはできない。さらに、近世における国家形成と政治的交渉は、新たな形態のレントシーキングを生み出したが、しかし、政治的集権化はより狭い領域で生じたであろうレントシーキングの機会を広範に除去したとする。³¹⁾

これに対して、オーグルヴィは以下のように応答する。³²⁾まず、エプスタインは、ギルドが生み出す死荷重損失を営業特権獲得のために要した費用から得られるとしているが、これには概念上の混乱がある。なぜなら、第1に、経済全体に対する死荷重損失は、ギルド構成員の独占レントとは全く別物であり、第2に、ロビー活動においては競争市場が存在しないので、ギルド構成員の独占レントは、ロビー活動のための支出を基準にして測ることができないからである。また、エプスタインは、ロビー活動に対する親方1人当たりの支出額を算出する際に、全親方数を600~650人としているが、それは150~250人の誤りであり、また、ロビー活動は、金銭的な負担だけでなく、時間・努力・臨時税の負担を要した。

エプスタインは、ギルドのレントシーキングが、国家を諸中間団体の活動の調整役とすることによって近代以前の経済に利したとしているが、オーグルヴィは、この議論には飛躍があり、実証的な根拠がないと批判する。そもそも国家による調整が必要であったのか、近世国家の政策は調整を提供したのか、国家による調整から得られる利益が独占とレントシーキングのコストを上回るものであったのか、といった問題が依然として残っているのだと。

5 ギルド史研究のアプローチをめぐって

オーグルヴィとエプスタインの間の論争は、前節までにおいて整理してきた4つの論点に留まらず、ギルド史研究の方法にも及んでおり、本節ではこの点について整理する。

オーグルヴィは、修正論を批判する際に、主としてヴェルテンベルクのウステッド工業関係のギルドの事例に基づいており、この事例をどこまで工業化前ヨーロッパの手工業生産に一般化できるのかという点が第1の論点となる。オーグルヴィはヴェルテンベルクの事例をギルド制が強固な事例として位置づけ、16世紀以降ギルド制が弛緩したイングランドやネーデルラントでウステッド工業が進展していることと対比して、ギルド制が経済発展にとって障害となったとする。そして、ヴェルテンベルクの事例は、それをギルド制の存在する他のすべての経済に一般化することはできないとしながらも、近世ヨーロッパ経済の標準的な事例に近いものであったとし、イングランドとネーデルラントの経済は例外的な存在であるとする³³⁾。これに対して、エプスタインは、近年のギルド史研究の成果によりながら、イングランドとネーデルラントにおいては、ギルド制が18世紀まで機能していたとし、他方、ヴェルテンベルクの事例を特殊な事例として位置づける³⁴⁾。

さらに両者の間には、個別事例からどのように一般理論を組み立てるのか、という方法をめぐっても対立がある。すなわち、オーグルヴィは、ギルドに関する一般理論を検証する最善の方法は、ギルドが実際にどのように行動したのかを明らかにし、そして、ギルドに組織された産業とそうでない産業とを比較することであると、こうした経験的方法に対する嫌悪がエプスタインの論文には浸透していると批判する³⁵⁾。これに対して、エプ

スタインは、オーグルヴィの発想が、伝統的な二項対立的発想——すなわちギルド＝保守 vs. 非ギルド＝進歩的、ギルド規制の弱いイングランド・ネーデルラント vs. ギルド規制の強いドイツ、議会制国家 vs. 絶対主義国家といった対立図式——に縛られているとし、歴史的現実がそうした単純な二項対立で説明できないほど複雑であったとする³⁶⁾。そして、エプスタインは、個別のギルドについてみれば、中世から近世にかけて衰退したものもあれば発展したものもあり、その原因が多様であったことを前提としたうえで、そうした個々のギルドの盛衰にもかかわらず、ギルドが組織のフォーマットとして長期にわたり広範に存続した理由を解明すべきであると³⁷⁾する。

第2の論点は、制度の長期にわたる存続をいかに説明するかという点である。オーグルヴィは、修正論がギルド制度の長期にわたる存続の理由をその制度の効率性 efficiency に求めることを批判し、ギルド制度が効率的な制度ではないにもかかわらず、長期にわたって存続した理由の説明を試みる。すなわち、ギルドのような制度は、それを廃棄することによって得られる利益全体が大きいかいけれども、その利益が多数の人間（その産業に参入する可能性のある者、労働者、消費者など）に分散してしまうので、結果として、個々の受益者からすると、その制度を廃棄することによって得られる利益が小さくなり、その制度を変えようとする政治的行動の費用を負担するインセンティブが小さくなる。他方、廃棄することによって生じる損失は、相対的に小さいけれども、少数の集団（ギルドの親方、主としてギルド役人）に集中しており、1人当たりの損失が大きくなるので、損失を被る個々の人間はその制度を存続させるための政治的行動の費用を負担する強いインセンティブを持つことになる。そしてまた、ヴェルテンベ

ルクの事例は、併存する複数の強力な利益集団（ギルド、商人の組合、地域共同体、領邦など）が相互に大きな利益を得ていたため、ギルド制度も存続したのだとする。したがって、オーグルヴィは、ギルドが、市場の失敗を是正するよりも、構成員の独占レントを追求する強力なインセンティブを生み出したとするのである。³⁸⁾

こうしたオーグルヴィの見解に対して、エプスタインは以下のように批判する。近年のギルド研究は、ギルドが極めて効率的な経済制度であると必ずしも楽観的に評価しているわけではないとする。ギルドにはレントシーカーとしての側面があり、進歩の障害となる側面もあったが、その組織が生み出す集計的な便益は、その損失を上回っていたと主張する。13～18世紀の技術的・商業的・政治的環境において、ギルドは、ほとんどの都市の手工業者がスキルを獲得し配置するための重要な母体となったとする。³⁹⁾

おわりに

以上の紹介からわかるように、オーグルヴィはギルドを営業独占の団体として捉えているのに対して、エプスタインはそれを市場の不完全性を克服する効率的な経済組織として捉えている。オーグルヴィとエプスタインが描くギルド像は極めて対照的であり、論争に決着をつけることは容易なことではないが、論争が重要な論点を広範囲にわたってカバーしており、理論と実証の両方のレベルにおいて新たな研究をさらに促すと思われる。最後に、ギルド史研究の視角・方法に関する論点に限って、重要だと思われることを5点ほど指摘して、むすびにかえたい。

第1は、両者のギルド像の相違の前提にある、中・近世ヨーロッパの「市場経済」のイ

メージについてである。オーグルヴィにあっては、中・近世ヨーロッパ経済において営業独占が実現可能であると想定し、だからこそギルドの営業独占がマイナスの影響を及ぼすと論じることができる。他方、エプスタインにあっては、中・近世ヨーロッパの市場経済は極めて競争的であると想定し、そもそも営業独占が成り立たないとし、それにもかかわらずギルドが長期にわたりヨーロッパ的な規模で存続したのは、効率的な経済組織だからなのである。したがって、議論の前提条件に関する理解が異なるのだから、両者の間の溝を埋めることは難しいといわねばならない。

だが、中・近世ヨーロッパの「市場経済」がどこまで独占的／競争的であったのかについては、必ずしも自明なことではないように思われる。確かに、近年の研究動向は、市場メカニズムの作用を従来の研究よりも重視する傾向にあるが、産業や地域によって異なるであろうし、とりわけ要素市場については、ヨーロッパのなかにあっても地域差が大きいように思われる。エプスタインがギルドの再評価に際して主として材料とするのがイングランドやネーデルラントのギルドであるのに対して、オーグルヴィが主たる材料とするのがドイツであるというのは、やはり両者の間に見解の相違を生み出す事情なのではないだろうか。エプスタインが、従来の研究を批判して、イングランドやネーデルラントにおけるギルド制の“強さ”を評価するとき、それは営業独占が強力であったとっているわけではなく、市場メカニズムが作用する条件のもとでもギルドが存続したことを主張しているのであって、したがって、イングランドとネーデルラントの経済が営業独占の成立しにくい条件のもとにあったと理解している点では、オーグルヴィと共通しているのである。他方、エプスタインがヴェルテンベルクの事

例を特殊な事例として位置づけるのも、ここでは市場メカニズムが作用しにくいと想定しているからではないだろうか。両者のギルドに対する評価は異なるものの、前提となる「市場経済」の地域差に関するイメージは案外共通しているのではないか。だとすると、ある特定の地域のある特定の産業のギルドを検討する際には、どのような条件のもとで営業独占／市場メカニズムが作用するのか、ということを変更して考察する必要があると思われる。後にも触れるように、考慮すべき条件としては、経済的側面については社会的分業の展開や市場の規模などが、政治的側面については王権・領主権・都市といった政治権力とギルドの関係が考えられるであろう。

第2は、論争の具体的な論点となった、品質管理、職業訓練、技術革新とギルドの関係についてである。これを、オーグルヴィは否定的に捉えるのに対して、エプスタインは積極的に評価しているが、営業独占が品質管理・職業訓練・技術革新にマイナスの影響を及ぼすと想定している点では、両者の間に大きな違いはないと思われる。しかし、営業独占が直ちに品質やスキルの低下を招くといえるだろうか。供給をコントロールできる条件のもとであっても、消費者のニーズに応えることができなければ、営業独占は成り立たないであろう。そしてまた、中・近世ヨーロッパの経済においてモラル・エコノミーの原理が作用していたとするならば、消費者の保護という観点からギルド規制が必要とされたのではないか。

また、仮に営業独占にマイナスの作用が認められるとしても、ギルド規制が弱ければ直ちに品質管理・スキルの養成・技術革新がうまくいくとは限らないであろう。オーグルヴィは、ギルド規制の弱い地域で工業の発展が順調であったことを指摘しているが、品質

管理、スキルの養成、技術革新にプラスの影響を及ぼす制度について積極的に論じているわけではない。制度に関する研究は、市場経済はそれを支える制度があって初めて機能するという点に着目するところが肝要であり、経済発展を促す制度について積極的に論じる必要がオーグルヴィにはあると思われる。こうした観点からみると、オーグルヴィも事例としてあげている、16世紀半ばに農村工業として展開してきたホントスホーテのセイ織工業のように、ギルド制の形はとらないにもかかわらず徹底した品質管理を行っている事例は興味深い検討材料となるであろう。⁴⁰⁾

第3に、ギルドの多様性や地域差をどのように説明するかという点について触れておきたい。オーグルヴィにあっては、ギルドの本質を営業独占とみており、ヴェルテンベルクの事例を典型的な事例として位置づけているのに対して、エプスタインにあっては、ギルドを効率的な経済組織として捉え、イングランドやネーデルラントの事例をむしろ重視する。両者の間でギルドの本質規定が根本的に異なるのだから、当然ギルドの多様性・地域差の説明の方法も異なっており当然であるが、ここでは、同じ制度であっても、併存する他の諸制度との関係を始めとして、それがおかれている政治・社会的・経済的条件が異なれば、異なる結果をもたらすことがありうるということを確認しておきたい。修正論者も、ギルドがレントシーカーであったこと自体を否定しているわけではなく、他方、オーグルヴィも、領主権力によって保護された農村工業の発展を背景にして、リールやトゥールネーなどのギルド規制が弛緩したことを指摘しているのであって、ギルド規制には地域差があったことを認めている。とすると、ギルド規制の強さ／弱さにも幅があったことになり、そうした違いを生み出す要因について検討する

ことが必要であろう。

第4に、論争のひとつの意義が、政治的条件に着目した点にあることに留意しておきたい。オーグルヴィは、ギルドによるロビー活動の重要性や、政治権力がギルドのような団体の特権を保障することができないようなところでは、ギルドが弱体化することがあったことを指摘している。他方、エプスタインも、近世における集権化が持つ意義について仮説を提示しており、今後検討すべき重要な論点である。そもそも中間団体が、他の中間団体、あるいは上位の団体、下位の団体との関係の中で相対的に厚みを増したり減じたりしてきたのが歴史であるならば、ある特定の社会関係資本を単体で取り出してきて、その役割を評価するというのではなく、全体のなかでの位置を見極めながら検討すべきであろう。

最後に、本稿で紹介した論争においては、明示的に取り上げられていないが、重要だと思われる論点について触れておきたい。本稿で紹介した論争の主たる論点は、工業化前ヨーロッパ経済における技術であった。確かに、経済発展のあり方の特徴を工業化前後で大きく二分するような通説的な解釈において、工業化前経済における技術革新の意義が過小評価されてきたことからすれば、工業化前社会における技術革新に関心を集めたことは、既成の二分法的な発想を相対化するうえで大きな意義があるといえる。だが、工業化前社会における経済発展の原動力として、社会的分業の展開にも着目すべきではなかろうか。社会的分業を原動力とする市場経済の発展は、かつて我が国の西洋経済史研究において関心を集めたテーマであったが、近年再び、近世における経済発展のあり方を説明する概念として関心を集めている。斎藤修によれば、近世ヨーロッパ社会はすぐれて市場社会であり、工業化以前にすでに経済成長は開始して

おり、その原動力となったのは分業の展開であったとされる。すなわち、中間財生産部門の分化によって、部門間に新たな市場が成立し、収穫逡増をともなう経済発展が実現するとされる⁴¹⁾。

とすると、ギルドと社会的分業の展開の関係について議論を深める必要があるのではなかろうか。ギルドが、職業ごとに、しかも一定の加入強制をともなって形成された点は、比較史的に見てもヨーロッパのギルドの大きな特徴であるとされている。すなわち、ギルドは、分業の展開のあり方(斎藤のいう、水平方向の分業関係だけでなく垂直方向の分業関係をも含む)を「仕切る」機能をもち、そうすることで一定の秩序を形成していく役割を果たしていたと思われる。したがって、その「仕切り方」如何が分業の展開のあり方に大きな影響を及ぼし、経済発展のあり方を規定するひとつの要因となったと想定できるのであり、今後検討すべき課題のひとつではないか。

〔付記〕

本稿は、平成18～20年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「18世紀イギリス都市における市民的社交圏の形成」(課題番号18330075, 研究代表者・中野忠)および平成18～21年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「近世イギリスにおける都市基盤整備に関する研究」(課題番号18530264, 研究代表者・唐澤達之)による研究成果の一部である。

(からさわ たつゆき・本学経済学部教授)

〔注〕

1) ギルドguildは多義的な言葉であるが、本稿で紹介する論争が手工業的ギルドcraft guildを対象を限定しているので、本稿におけるギルドの

- 用語法もそれにしたがう。
- 2) この論争については、坂巻（1999）；拙稿（2000）などを参照。また、1980年代までのギルド史研究の潮流については、坂巻（1987）、第1章を参照。
- 3) イングランドのフラタニティについて、拙稿（2003）；拙稿（2005）などを参照。
- 4) 酒田（1991）、第6章；佐久間（1999）などを参照。
- 5) 近年の代表的な研究として、Epstein（1998）；Lucassen, De Moor & van Zanden（2009）；Epstein & Prak eds.（2008）；Prak, Lis, Lucassen & Soly eds.（2006）などを参照。
- 6) North（1973）；North（1990）；Greif（2006）。
- 7) Putnam（1993）。
- 8) Ogilvie（2004）。
- 9) Epstein（2008）；Ogilvie（2008）。エプスタインは、彼の原稿が2006年8月に*Economic history review*誌の編集委員会に受理された後に急逝したため、オーグルヴィの応答を読むことはできなかった。
- 10) Pfister（1998）、pp. 14-18；Gustafsson（1987）、pp. 13-24。
- 11) Ogilvie（2004）、pp. 291-301。
- 12) Epstein（2008）、pp. 158-160。
- 13) Ogilvie（2008）、pp. 176-177。
- 14) Ogilvie（1997）、pp. 348-357。
- 15) Epstein（1998）、pp. 688-693；Pfister（1998）、pp. 14, 18。
- 16) Ogilvie（2004）、pp. 302-314。
- 17) Epstein（2008）、pp. 160-162。
- 18) Mitch（2004）、pp. 339-40。
- 19) Ogilvie（1997）、p. 205。
- 20) Ogilvie（2008）、pp. 177-178。
- 21) Epstein（1998）、pp. 693-705。
- 22) Ogilvie（2004）、pp. 314-318。
- 23) Ogilvie（2004）、pp. 317-322。
- 24) Epstein（2008）、pp. 163-165。
- 25) Epstein（2008）、pp. 164-165。
- 26) Ogilvie（2008）、pp. 178-179。
- 27) Putnam（1993）。
- 28) Raiser（2001）。
- 29) Ogilvie（2004）、pp. 322-330。
- 30) Epstein（2008）、pp. 165-168。
- 31) 近世における国家形成と経済成長の関連については、Epstein（2000）も参照。
- 32) Ogilvie（2008）、p. 179。
- 33) Ogilvie（2004）、pp. 179-180。
- 34) Epstein（2008）、pp. 156-157, 169。
- 35) Ogilvie（2008）、p. 180。
- 36) Epstein（2008）、p. 169。
- 37) Epstein（2008）、p. 171。
- 38) Ogilvie（2004）、pp. 329-331。オーグルヴィは、Ogilvie（2007）において、制度の長期存続を説明する諸理論を整理しながら、分配の観点から独自の理論を展開している。
- 39) Epstein（2008）、p. 172。
- 40) ホントスホーテのセイ織工業は、15世紀後半に復興し、16世紀にかけてフランドルを代表する農村工業となる。その全盛期である16世紀半ばに品質管理に関する詳細な規約が制定され、手工業ギルドに類似した組織が形成されている。佐藤（2007）、71-75頁を参照。
- 41) 斎藤（2008）、第2章を参照。

【参考文献】

- 斎藤修（2008）、『比較経済発展論 歴史的アプローチ』岩波書店。
- 酒田利夫（1991）、『イギリス中世都市の研究』有斐閣。
- 坂巻清（1987）、『イギリス・ギルド崩壊史の研究——都市史の底流——』有斐閣。
- 坂巻清（1999）、「近世ロンドン史研究の動向と課題——「危機」と「安定」を中心に——」イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』刀水書房。

- 佐久間弘展 (1999), 『ドイツ手工業・同職組合の研究』 創文社.
- 佐藤弘幸 (2007), 『西欧低地諸邦毛織物工業史——技術革新と品質管理の経済史——』 日本経済評論社.
- 拙稿 (2000), 「イギリス近世都市共同体論の一向」 道重一郎・佐藤弘幸編『イギリス社会の形成史——市場経済への新たな視点——』 三嶺書房.
- 拙稿 (2003), 「中世後期イングランドのフラタニティ」 『高崎経済大学論集』 45巻 4号.
- 拙稿 (2005), 「都市の生活文化を支えた集団——フラタニティ——」 綾部恒雄監修・川北稔編『結社の世界史 4 結社のイギリス史——クラブから帝国まで——』 山川出版社.
- Epstein, S. R. (2000), *Freedom and growth: the rise of states and markets in Europe, 1300-1750*, London.
- Epstein, S. R. (2008), 'Craft guilds in the pre-modern economy : a discussion', *Economic history review*, LXI.
- Epstein, S. R. & Prak, M. eds. (2008), *Guilds, innovation and the European economy, 1400-1800*, Cambridge.
- Greif, A. (2006), *Institutions and the path to the modern economy*, Cambridge.
- Gustafsson, B. (1987), 'The rise and economic behaviour of medieval craft guilds', *Scandinavian economic history review*, 35.
- Lucassen, J., De Moor, T. & van Zanden J. L. eds. (2009), *The return of the guilds*, *International review of social history supplement*, 16, Cambridge.
- Mitch, D. (2004), 'Education and skill of the British labour force', in R. Floud and P. Johnson, eds. (2004), *The Cambridge economic history of modern Britain, I: Industrialisation, 1700-1860*, Cambridge.
- North, D. C. (1990), *Institutions, institutional change, and economic performance*, Cambridge. (竹下公視訳『制度・制度変化・経済成果』 晃洋書房, 1994年).
- North, D. C. & Thomas, R. P. (1973), *The rise of the Western world : a new economic history*, Cambridge. (速水融/ 穂本洋哉訳『西欧世界の勃興——新しい経済史の試み——』 ミネルヴァ書房, 1980年).
- Ogilvie, S. (1997), *State corporatism and proto-industry: the Württemberg Black Forest, 1580-1797*, Cambridge.
- Ogilvie, S. (2004), 'Guilds, efficiency, and social capital: evidence from German proto-industry', *Economic history review*, LVII.
- Ogilvie, S. (2007), "Whatever is, is right" ? Economic institutions in pre-industrial Europe', *Economic history review*, LX.
- Ogilvie, S. (2008), 'Rehabilitating the guilds: a reply', *Economic history review*, LXI.
- Pfister, U. (1998), 'Craft guilds and proto-industrialization in Europe, 16th to 18th centuries', in Epstein, S. R., Haupt, H. G., Poni, C. & Soly, H. eds., *Guilds, economy and society*, Sevilla.
- Prak, M., Lis, C., Lucassen, J. & Soly, H. eds. (2006), *Craft guilds in the early modern Low Countries: work, power, and representation*, Aldershot.
- Putnam, R. (1993), *Making democracy work: civic traditions in modern Italy*, Princeton. (河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造——』 NTT出版, 2001年).
- Raiser, M. (2001), 'Informal institutions, social capital and economic transition', in Cornia, G. A. & Popov, V. eds., *Transition and institutions: the experience of gradual and late reformers*, Oxford.